にんげんドラマ

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
にんげんドラマ

【Ｎコード】
Ｎ５６９２Ｉ

【作者名】
月島　真昼

【あらすじ】
「立てない哲学者」「俺様男」「銀行強盗の共犯」「ポケモン女」四人の織り成すラブコメ？、ミステリ？、月島真昼のお送りする中途半端系群像劇です。※都合によりもうしばらく休載しますｍ（＿）ｍ

『立てない哲学者　1』

「巨大隕石が地球に墜ちて来るからお前ロケットに乗ってぶっ壊してこい」って言われるとまあだいたいの人間はノーと答えるだろう。まあ自殺志願者は命の有効利用が出来ると喜ぶかもしれないが。

次に蜜蜂の生き方を考える。蜂の世界は女王蜂に組織された完全な縦社会だ。僕らの生きる世界と少し似ていると思う。

ただし決定的に違うことがある。蜜蜂は躊躇いなく隕石にロケットで突っ込むのだ。おそらく知ってる人も多いと思うが蜜蜂は雀蜂なんかに襲われると集団で雀蜂に引っ付いて熱を発して蒸して殺す。そしてその熱で自身も死ぬ。

「それは隕石とは違うだろ」と思う人は隕石をナイフを持った殺人鬼と置き換えてくれて相違ないと思う。もしくは動物園の檻から放たれた猛獣ってとこだろうか。

人間が他の動物と違うところがあればそういう部分だと。否、そういう部分以外に何があるのかと僕は思う。

「君もそう思わない？」

対面に座る彼女に同意を求めてみた。

なにやら哲学臭い語りで興味を引いてみたがぴっかぴかの大学一回生である僕は彼女に一目惚れしたのだった。うむ、脈絡が無さすぎる。

僕は返事を待った。そのあいだにじっくりと蕎麦を咀嚼する彼女

を眺める。
　んむ。くすんだ大学の食堂で彼女のいる場所だけが輝いている。ただその顔が世界に興味がないような無表情を基調にしていることだけが僕を嘆かせる。世界から興味を持たれてるようにしか見えないというのに。

「ん　そーね」

　蕎麦を呑み込んだ彼女は気のない相槌を打つと余所見をしながら新しく蕎麦に取って、啜った。その視線の先には穴という穴から女の子が好きそうな香りが漂ってきそうなイケメンが居ることに僕は気づいている。
　しかし彼女が彼を見てるのはいつものことなので別に嘆息しない。

「あなたの言ってることは毎回毎回中身がなくてつまらないわ」

　もう一口、ざる蕎麦がツルリ　と啜られる。僅かに跳んだ汁がテーブルクロスに焦げ茶色の染みを残して僕は彼女の使うつゆの器とテーブルクロスどちらになるのが幸福か真剣に検討し、箸になればいいじゃないか！　と安易極まりない結論を出した。

「聴いてなかったクセに」

　それから笑みを見せて言った。

「人間は別段難しいことなんて考えなくても生きていけるの　周りの顔色を伺うすべさえ身に付ければね」

　キミは身に付けてないじゃないか　発音する前に彼女がざるそばを食べ終わったので僕は水を無銭飲食して一緒に席を離れた。席を

立ったという表現は微妙に僕にはふさわしくないのだ。

「ついてこないで」

「僕も同じ講義を取ってるからついていかないと欠席にされる」

「あなたの席は永久欠番よ　名誉なことね」

「背番号以外でそれが名誉な状況を訊きたいな」

「天然痘は１９８０年に永久欠番になされました」

「わぉ　そりゃ名誉だ」

彼女は無表情のまま口元を微かに緩ませた。勝ち誇ってるのかな。だけどそのまま何も言わずに早足になって僕を置き去りにした。……ふむ、失敗した、かな？

僕は自分の車椅子をゆっくりと走らせる。

彼女からかなり遅れて僕は講義室に入った。彼女は前から3列目の右から二番目の席に座っていた。いつも最前列の中央を取るイケメンがそこから覗き見れることはなんとなく察している。

僕はまっすぐ彼女の隣に向かった。

「やぁ」

気さくを装ってみた。彼女はなるべく無表情のまましかめっ面を作る。

「ストーカー」

あっはっは　否定はできないな。

「他に席が空いてないんだよ　ほら、車椅子じゃ中央は取り辛いし」

端の席は講義が終わったあと外に出やすいので人気なのだ。

そもそも彼女の隣がいつも空くのは僕のせいではない。彼女が無表情とATフィールドを基本装備にしているから近より難く感じているんだろう。

「だいたいなんでわたしに付きまとうわけ？」

「前にも言っただろ？」

まだ入学して2週間だけど。

「あーはいはい」

それ以上言うな、そう横目で示して彼女は手のひらで僕とのあいだに壁を作った。だけど音声はそんなちゃちな壁では阻めない。

「君に一目惚れしたんだ」

車椅子で四苦八苦しながら大学に来てドアの前で方向転換に手こずってたとこに「邪魔　退いて」なんて言われた日にはもう惚れるしかない。

彼女は僕に目を向けて困った物を見る目になった。その表情の変

化が僕は嬉しい。

「一回あんたの頭を解剖して中身を調べてみたいわ……」

嘆息して彼女はイケメンと黒板の中間からノートに目線を落とした。

「立派な目標だね」

微笑んでみた。壁にしてた手のひらがそのまま顔面に飛んできた。鼻を打つ。

「面倒……」

彼女は心の底から呆れ反った声を出した。

講義が終わって僕は彼女と別れ　（追い払われたとも言う）　自分の時間割りを思い出した。そしていまのが最後の講義だったことに気づいた。

さて、どうしようか。

中庭のベンチの横で止まる。いつでも座ってる僕だけどここのほうが気分が出るのだ。１人で迷ってたらイケメンこと大橋　友也さんが通りかかった。

「お？」

向こうが小さく声をあげて足を止める。

「ん？」

あれ？　あっちは僕のことを知ってたっけ？

近づいてきた。微笑んでみる。向こうは完璧に整った笑みを作った。

「はじめまして、だよな？」

大橋はベンチに腰を降ろす。周囲を行き交う女子の視線が　（大橋にだけど）　集中して少し居心地が悪い。

「うん　はじめまして」

「あんたのツレ　いつもこっち睨んでるだろ　あれ、なんでだ？」

……この発言、もしかして天然なのかなぁ。

「キミのことが好きなんじゃないかな？」

大橋は「なんかそんな感じじゃないんだよなぁ」と首を捻った。

僕はそうだったらいいなと思い苦笑する。

大橋は僕を横目に眺めて「ちょっと似てるかな」と何かを自己完結した。それから、

「あんた　サークルは？」

と、何の関連性もなさそうな話題を切り出す。なんだったんだろ？

「まだ決めてない」

「ミステリー研究会、入る気ないか？」

……わりと本は好きだしミステリー物もよく読むけど。

「もう少し考えて決めるよ」

彼女がもしどこかのサークルに入るならストーカー　（↑誇大広告であると思いたい）　として追いかけないと　ねぇ。

「そっか」

大橋の目が少しだけ曇った。僕なんか誘わなくても彼が一声かければ女性が二山分ぐらいは押し掛けるだろうに。

「どうして僕なの？」

大橋はなぜか気恥ずかしそうに鼻の頭を掻いた。

「あんたの雰囲気が少しだけ知り合いに似てる」

「その人　足は？」

「幽霊とかいうオチじゃないか　って？」

躊躇いなく彼が答えて僕らは2人で声を殺して気味悪く笑った。なんだ、悪いやつじゃなさそうだ。

互いに気を使わなくていい会話を彼女以外としたのは久し振りだ。あっはっはっ　嫌なやつならよかったのに。

「あー……　そういや自己紹介がまだだったな　大橋　友也、趣味はいまは読書ってことにしてる」

「日向　大地　（ひむかい　だいち）　よろしく」

『立てない哲学者　1』（後書き）

『ポケモン女　1』

生まれて１９年も経っていろいろ経験したつもりだったが家を追い出されたのはさすがに初めてだった。そうされてようやく外の景色が春であることに気づいたのだから救えない。公園の桜が満開。パソコンのディスプレイは桜を映してはくれなかったし、隅に映る日付は小さすぎた。私はいったいどのくらいの時間を家から出ずに過ごしたんだろう。最後に外出した記憶は……　あれ？　思い出せすらしない。

「うちには引きこもりを飼ってる余裕なんてないの！」

代わりにさっきの母さんの声が浮かんだ。御飯とお風呂以外に部屋から出ることを拒否しているカビゴンな私に対して遂に叫んだのだ。ヒステリー気味な声であった。首根っこをひっ掴まれて家を叩き出された。密かに再婚を目論んでいる母さんにはたしかに私の存在は目の上のたんこぶだろう。

まあ叩き出されたのは当然の既決だとは思うが炬燵という布団と暖房器具の２つの役割の元にぬくぬくと庇護されていた私にはまだ冬の残宰が厳しかった。世間では小春日和というやつなのかもしれないけど常時炬燵にこもり暖房をいれて室温２５度で生息している私には耐えられない。

せめてマフラーを……　玄関を叩いたらなぜか大量のマッチが投げつけられた。火事でも起こせと？　いや　売ってこいと言ってるのか。マッチ売りの私。むぅ……　かわゆさ成分が不足気味である。カビゴンが恋しい。あれよりかわいいやつはいないと思う。……よく自爆させるけど。ついでのようにドアのあいだからマフラーと私

の携帯電話が投げ出された。拾いあげて埃を払う。双方から土埃だけじゃなく生粋の綿埃がたくさん巻き上がった。月日、というか年月の経過を感じさせる。一通り埃を落とし終わってマフラーを巻いた。ついでに誇りも落ちていった気がする。マッチは……　１箱だけ携帯電話と一緒にポケットに入れて残りはキレイに積み直しておいた。丁度６つ、テクバレＰが止まらんぜ。↑スルー推奨。

「……拝啓、ジョン・レノン～」

足りない体温をテンションで補ってみようと昨日たまたま音楽番組でみたテンポのいい歌を口ずさんでみた。

でもうろ覚え過ぎですぐに詰まってしまった。私の人生みたいだと思った。

生き方がうろ覚えだから、すぐに詰まるのだ。

とりあえず街まで歩いてきた。朝方の街には人の姿もまばらで私には過ごしやすい。通勤ラッシュはもう過ぎてるみたい。助かる。私は「群衆」というやつが堪らなく苦手なのだ。だから母親が頻りに薦めた広い高校の４０人近い人数が押し込まれる狭い教室で、しかもそこで多少の揉め事があって耐えられなくなってしまった。あれ？　揉め事が先で群衆が嫌いになったんだろうか？　前後が微妙に思い出せない。ちなみにそれまで私の通っていた地方の分校は中小一貫で全校生徒あわせて１２人だった。高校に上がるのにあわせて引っ越しまでしたというのにほんと申し訳ない限りだ。

ふむ。そういえば時計を持ってない。いつまでも鳴らない携帯電話は部屋の隅で埃を被って……　あ、いまはポケットの中か。……ふむ。立ち止まる。時間なんてほんとはどうでもよかった。携帯を

開く気はない。絶対、嫌だ。

……あぁ、空気が澄んでるなぁ。記憶にある田舎ほどではないけど私の部屋とはあきらかに違う。肺一杯に吸い込む。なんとなく新鮮。そういえば周りの景色も私の部屋よりかなり色が濃い。同じ灰色でも光のあたりかたでやっぱり違うんだなぁ……　電灯と太陽の違いを噛み締めて感心する。

でも2分じっとしてたら飽きた。

これからどうしよう。引きこもりでいる現状をなんとかしようとはたしかに心の何処かで思ってはいた。だけどどうすればいいのかわからない。

んー……　逆ナンパ。引きこもりっぽくない行動を思い浮かべてみた。煙草……　は引きこもりでも吸いそうだしお酒だってそうだ。ここまで考えて私は「一般人」ってやつをなんだと思ってるんだろうと少し笑った。

よし　目指せ、脱・引きこもりだ！　どうせなら６００族ぐらいのイケメソを捕獲してやるぜ！

私は逆ナンをするために意気揚々と歩き出す。煌々と朝を照らす日は私の未来もついでに照らしてくれるだろうか？

『ポケモン女　1』（後書き）

ポケモン用語の解説。

・６積み

「つるぎのまい」や「とおぼえ」のような能力を上げる技を使うことを“積み”といい６回（“ぐ～んとあがった”の場合は３回）使うと最大でそれ以上あがらなくなる。

・テクバレＰ

テクニシャンの特性を持つハッサムのバレットパンチ　（鋼タイプ／威力４０の先制技）　のこと。タイプ一致込みで威力９０と先制技のなかでも高威力の神速を上回る。ちなみに補正あり攻振り拘りで無振りゲンガーを乱１で落とせる←スルー推奨。つるぎのまいから繋げるバレットパンチは特に強力

・６００族

種族値というポケモンごとに決まっている基本のステータスの合計が６００のポケモン。カイリュー、バンギラス、ボーマンダ、メタグロス、ガブリアス、その他伝説数匹が該当。弱点は酷いが基本的にめっちゃ強い。

・役割

通信対戦の用語、簡単に言えば交換から出しても優位に立てること。

『立てない哲学者　2』

大橋　友也の名前を知らない一回生は居ないだろう。難関と言われるこの大学の試験を満点でパスし入学式で壇上に登って振り返ったとき、その完璧な容姿に「天は二物を与えない」なんてことはないのだと思い知った。

選ばれた人間と選ばれなかった人間。

彼はあきらかに前者で僕らは絶対的に後者だった。

「それでも僕は彼女を渡したくない」

僕は決意表明と同時に牌を打った。中だ。

「ポン」と上家の優生が言った。「ロン」と対面の信也が言った。隆弘はつまらなさそうに自分の手牌に目を落とした。彼らは高校時代からの友人で大学は別である。

……あれ？　が優生が中をポンしたくて信也がロンってことは中が頭じゃない限りは……　河の中に「中」を探した。僕が捨てた以外にもう一枚あった。

「国士だ」

信也が薄く笑って牌を倒した。３種類の牌の１、９と東西南北、それから發が全て１牌ずつで白だけが２牌　（正確には２牌あるのはこの中でならなんでもいい）　。これに中を加えると「国士無双」という麻雀のルールから逸脱した唯一……　ではないか　七対子もそうだし　の役になる。役満、つまり最も高い役の一つだ。信也は

ポーカーフェイスにも程がある。

「飛んだ」

僕は１８０００あった点棒を卓上に投げた。

「幸先悪いな　こりゃ女もその大橋ってやつに取られるんじゃないか」

いや　いまのはたった６順目で国士を張ってる信也がおかしい。

「はぁ～　四人打ちで役満なんか初めてみた」

優生が言う。僕もパソコンのソフトで字一色を出したことはあるけど実際に見たのははじめてだ。

「で　どうなん？　美人？」

信也が気だるそうに欠伸を伴って両腕を伸ばす。

「かなり、いや　めっちゃ　かな？」

もう半荘　（1ゲームの区切り）　と僕は人差し指を立てる。賭けなんかはしてないから気楽なもんだ。ちなみに前は賭けでやってたがそうなればほとんど隆弘と信也の一騎討ちになり、僕と優生に芽がないので止めた。

信也以外が牌をかき混ぜ始める。信也はもう興味が彼女にしかないらしい。

「見てみたいねぇその女　写メかプリクラ撮ってきてくれよ」

「……昨日そういうやり取りがあったんだ」

「だから？」

食堂でそばを啜る彼女は怪訝を交えた無表情で言う。

「写メとってもいい？」

「いいわけないでしょ　頭に蛆でも涌いてるんじゃないの？」

意識して辛辣な口調で彼女は返した。予期していた回答なので僕はやはり落胆しない。携帯電話の中に彼女が居ると思うと嬉しいけど　……想像したらやっぱり少し落胆してしまった。

彼女はまた大橋を見ている。彼は彼女に気づいてたけど彼女はそれを知らないんだよなぁ……

「あ　それと大橋だけどさ」

眉がピクリと動いた。それから横目に僕を睨み付ける。防御力が下がりそうだ。ちなみに弱い技だと思われがちだけどＦＲやＲＧが出るまで受けギャラの基本技だったんだぜ　にらみつける←何の話だとか訊くなよ。

「なんであんたからその名前が出てくるわけ？」

出ないと思ってたのかな？　忌々しそうに彼女は舌打ちを１つ。

僕に恥部を知られたのが気に喰わないんだろうな。

「彼、ミステリー研究会に入るみたいだよ」

「……」

両刃の剣だとは理解してるけど彼女がミス研（これだけみたら女性研究会かなぁと思ってしまうのは僕だけだろうか？）に入って僕も入れば彼女と居れる時間は劇的に増加する。結果として大橋とくっついてしまえばそれはやむを得ないとしよう。

……ふむ。感触は、ある、かな？

「どうしてそんなこと知ってるの？」

「本人から直接誘われた」

「それであなたは入るの？」

「まだ考え中」

内心では君が入るならと答えた。彼女のほうは“あなたが入らないなら”とか考えてそーだ。あっはっはっ、笑えねーよ。

「大橋　友也ねぇ……」

彼女は後頭部をガリガリと爪を立てて掻いた。なんていうか、無造作だった。あんまり雑な動作だったので地肌が傷つくんじゃないかと僕のほうが心配になった。

「ま、ありがと」

彼女は微妙にではあるが表情を緩めた。

……というわけでその顔いただき。パシャリ。結構きれいに撮れた。手ぶれ補正って素晴らしい。

「っ……　あんた何してくれてんの？！」

僕の額に遠慮のない彼女の拳が飛んだ。みっともなく車椅子ごと転倒しかけて後ろの机に肘を引っ掛けなんとか落下を止めた。そしたらついでに隣の人が見てるワンセグのニュースが視界に飛び込んで来た。「銀行強盗」のテロップが焼き付く。

「……あれ？」

「……」

彼女は無言でそばを啜る。やや苛立ちが目立つ。そんなに撮られるの嫌だったのかな？

「これ、多分僕の友達だ」

ワンセグを見ていた知らない人がすごい勢いで僕を振り返った。だけど僕はそんなことより彼女の興味を引けなかったことを残念に思った。

『俺様男　1』

朝方になって俺はようやく穴蔵から這い出した。朝日が靄のかかる意識に柔い頭痛を誘う。昼前には排気ガスに汚れる空気もいまはまだ清潔を保っているのに、気分は良好とはいかなかった。

「ふぅ……」

一晩で稼いだ金にしてはポケットが重い。とりあえずはコンビニのＡＴＭにでも目指して冒険するか。

ＡＴＭのあるコンビニは少し歩くがこのまま持ち歩いてスリにでもあったら俺は餓死するハメになる。

なにせバイトも就職もしてない俺は稼ぎがこれしかないのだ。

……大学受験に失敗した。

俺の人生が大きく変わったのか狂ったのかはまだわからないが、ともかく真っ直ぐ真っ当に引かれていた道から逸脱したことには間違いはないだろう。

原因は明確、麻雀にハマったことだ。

ハマり過ぎて学生の本分である　（とされている）　勉学をおろそかにし過ぎた。信也達には俺の自尊心のために大学に行ってることにしてあるが、滑り止めなど一切考えずに国立大を受けた俺はきれいに滑った。君なら楽勝と言っていた高校教師を逆恨みする。いや　それ以上に、

「恨むぞ　信也め」

「は？」

唐突な俺の独り言に隣を歩く安西が怪訝な表情になる。
たったいますれ違った春先だというのにマフラーをした眼鏡の女が美人だったのでふと目で追った。優生だったら声をかけていただろうか？

「……なんでもねー」

「最近独り言多いスね　隆弘さん」

一人なら俺も声ぐらいかけたかも知れないな、と若干の呪いを込めて安西を見た。ちなみに安西は雀荘で賭け麻雀に勝ってる俺に「教えてくれ」と引っ付いてきた奇妙なガキだ。おそらくは中～高生のクセに昼間から雀荘に入り浸っていて別段上手くもないくせに最終的に少しだけ勝つ。運がいいんだろう。まあ無論トップは俺だが。

それにしても朝方まで徹夜で打っていたがためにまあまあの稼ぎ。これで当分のせいふぁふには……、ねみー……　大欠伸を一つ。

「……んでなんでお前は俺について来るんだ？」

「え　おこぼれにあずかろうかと」

屈託のない笑みを見せる。んむ　阿呆だ。麻雀で生活費を稼いでる俺みたいな人間は一円でも多く種銭が必要なのだ。奢ってやれるはずがない。

「っと」

なんだ、もう銀行開いてるじゃないか　つーかいま何時だ……？

携帯電話も持っていない非現代人は時間の確認も出来ないのか。

「なんか食べに行きましょーよー」

「お前の奢りならな」

袖にしがみつく安西を引き摺って自動ドアを潜り店内に入る。いや　銀行だから行内？　なんだか口内みたいで嫌だな。何気に店内を見渡しＡＴＭのほうへ歩く。早朝のせいか客入りは少なく手前から中年の女と大学生風の男、それから小肥りのおっさんがいただけだった。

ウィーン　俺の後ろで自動ドアが開いた。自分のときには聴こえなかった気がしたのに他人の出した音はなんとなくよく聴こえる。なんとなく振り返って音の元凶を見る。

「ん？」

入ってきたマスクをした男のジャケットに半分隠れたジーンズのポケット、そこから妙な膨らみが見てとれた。金……　か？

いや　あれは……

男は窓口に焦りとも取れる歩調で直進するとポケットからそれを抜いた。同時に卓上にスポーツバックを投げる。

「金を出せ　この中にありったけ詰めろ」

まだ人の疎らな行内に広がる悲鳴。銀行の入り口はまさしく猛獣の口内だったらしい。それから、

発砲。銃声。鮮血。

引き金を引くという1つの動作でそいつは3つの恐怖をその場にいた人間に与えた。店員　（銀行員だけが職員、公務員、社員、店員から独立してるのが俺はどうも気に食わない）　の一人が、腕を撃たれた。銀行には緊急時にボタン1つで警察に通報出来る設備があると聴いたことがあるがそれを押そうとしたんだろうか？　何気に俺は伊坂　○太郎のファンである。ってかなんだこの急展開。読者なめてるのか？

「2分以内だ　急げ」

銃口を突き付けられて震える店員には従う以外に選択肢がなかったらしい。

それを面白半分で見物する俺の2つ隣で、

プルルルルル　プルルルルル

やけに古典的な着信音が店内　（でいいや、もう）　に響いた。勿論携帯を持ってない俺の物ではないし安西の着信音はもっと洒落ていると記憶してる。っと、銃口が即座にそちらを掠める。パンっ！　弾丸は大学生風の足元に飛んだ。床を砕いて深く突き刺さる。

「……撃たれたくなかったら大人しくしていろ」

問答無用……　ではないのか？　僅かに疑問符が浮かぶ。

「隆弘さん……」

顔を青ざめさせる安西。

「なんだ？　トイレ行きたいとか言うなよ」

単独犯　（かそれを装っているかは微妙だが）　である以上行かせて貰える可能性はゼロだから。適当にあやした。

「いや、銀行強盗ッスよ　これ」

だが効果はないらしかった。俺はどうも人心掌握の能力に欠けているらしい。

「だから？」

「だから……って」

安西は戸惑うように視線をさまよわせる。浅慮な人間はこれだから。

「考えてみろ、あいつが俺達を撃つことのメリットはなんだ？」

「え？」

心底間の抜けた声を出す。やっぱ阿呆か。俺はそれ以上の口をつぐんだ。

犯人の目的は最初から明確、金だ。暴力はそのための手段に過ぎない。狂人仕様の暴漢とはあきらかに異なるのだ。台風と同じで下手に手を出さなければやり過ごせる類いの事象だと把握すればいい。

「2分だ、バックを寄越せ」

銃口の伴う動作に半分も詰まっていないバックが犯人に手渡される。それを受け取り銃をあちらこちらに振り回して慎重に後退る。
さっさと逃げろよ、面倒だな。正義感に駈られてお前にタックルかます狂人仕様のやつなんかこの場にいるかよ？　誰だって他人の金より自分の身がかわいいだろ。

犯人が自動ドアの前まで来たとき、ピーポーピーポー、と安西級に間抜けなサイレンが聴こえて来た。どうやら腕を撃たれたやつの近く以外にも通報ボタン　（仮）　はあるらしい。店内で一度鳴った着信音のほうはおそらく無関係だろう。

「ッ……」

犯人の背筋に電撃が走る。状況が一変する。クールを装う強盗がただの狂人へと変化する。警察が傷害を助長してどうする？　この場合、警察は責任は問われないのか？　少なくともあのまま銀行強盗くんが出ていけば俺や安西の安全は確保されていたというのに……

銀行強盗は手早く最も近くにいた人物に銃を向けた。

「えぇっ！？」

安西だった。前言撤回、運がないやつだ。

「こ、こっちへ来い！」

動揺が見え隠れする吃り口調の怒鳴り声。安西は泣きそうな顔で俺を見た。

「安西先生、バスケがしたいです」

俺は飛び切り爽やかな笑顔で彼を見送ってやった。

俺は自身が非常に努力家であることを自称する。学校や塾のテストでは一番を譲らなかったし、スポーツ関連も鍛えに鍛えて運動部のやつらにも引けを取らなかった。単なる負けず嫌いとも言うが。そんな俺が高校時代に友人との賭け麻雀にハマったとき俺の取った方法はやはり「努力」だった。

所謂、イカサマ。

元々向上心は強い俺であるからして技術の習得は案外容易かった。勝ちまくり、儲けまくった。

しかし麻雀仲間は俺の1人勝ちを当然よく思わない。少しすると容易に別のやつが俺の席に座り始めた。みっともなくしがみつきはしなかった。あいつらはわかっていない。勝利したければ努力すればいいのだ。努力しなければ敗北して当然だ。俺は端から高校生活に生温い馴れ合いなんか求めちゃいなかった。

しばらくして3人集まってもう1人を探してる麻雀のグループがいてそいつらに名乗りを挙げて俺は4人目に加わった。こいつらからも絞り取るだけとって消えようと思っていた。

当然俺はイカサマをした。そして当然のようにその腕を掴まれた。

「ヒラで打とうぜ？」

微笑して浅霧　信也は言った。

そしてヒラで打つと信也はデタラメに強かった。堅実な手を確実に作り出し、流れがあるときはリスクを恐れない。流れがないときの危険牌は正確に握り潰す。信也は大きな手が来ているときと立直のとき以外には先ず振らない。大地と優生は一騎討ちなんて言ってたが、正直あの頃は勝てる気がしなかった。いまやれば対等か、場数の差で俺が上か。

結局俺を含む他三人は賭けで信也と打つことを辞めた。

そして単純にこの複雑なゲームにのめり込んだ。全て信也のせいだ。うむ。暇だ。

退屈凌ぎに高校時代の知り合いである浅霧　信也や佐竹　優生、それから右足を切断して車椅子で生活することになった日向　大地を思い出してみたが、ちっとも時間が過ぎた気がしない。麻雀打ちたい。打ってたら４時間ぐらいはあっという間だった。

「……」

状況にはほとんど変化はない。安西　（と俺達）　が人質にされ警察は突入を躊躇い、いわゆる籠城戦となっている。

ドラマとかでよくある電話での説得は犯人が直接出ずに小肥りのおっさんに取らせて言葉を伝えさせた。いい手だ。自分は他に集中出来るし考える時間が出来る。それにいきなり電話口に知り合いを出されて揺さぶられることもない。

まっ　犯人に取っては、であって俺達に取っては悪手以外のなんでもないが。

……それにしても暇だ。欠伸が絶えない。よしっ　もう知ったことか。俺は犯人に背を向けた。それから身体を横たわらせる。

「そこのお前！　何やってる？！」

そこのお前、で背を向けてる人間が自分のことだってわかるかよ。

……あれ？　わかってるじゃねーか　俺よ。

「寝るっ！」

ふてぶてしく宣言して俺は瞼を閉じた。

『ポケモン女　2』

すれ違った長身で茶髪の男の顔立ちが希に見る整いっぷりだったので私は思わず振り返った。
なんていうか唯我独尊？　あー……　今風に言うと俺様系の全体的に表情の尖った男。ファッションも上から下までびっちり決めている。わぁ、イケメンだー。

まあ私は「イケメソ、恐い　（饅頭恐い的な意味合いでない）」な自信が０か１００　（１００は自分の趣味に対して）　の類いの人種であるため声をかけることは……　って、しまった。私は今日そんな自分を変えようと逆ナンしに来たんだった。いまからでも追いかけてみようかと思ってイケメンの隣に背の低い中～高生ぐらいの男の子が引っ付いていることに気付いた。弟……かな？　くそぉ、やつさえ居なければ。
そうやって声をかけなかった自分に対する言い訳のダシにする。ごめんね中高生。

……いいや　こんなことで挫けてどーするのだ！

君に決めた！　後ろ姿を指差して口の中で呟く。それからそれが昔よく見たアニメで使われた台詞だと気づいた。アニメは見ないけどそのゲームのほうはいまでも好きなのでよく覚えてる。なぜか少し嬉しくなって、だけどやっぱり飛行タイプを相手に主人公から出されて戸惑う草タイプの気持ちになった。あの俺様男は絶対飛行タイプだ。私は草って言うより虫タイプかも。

追いかける。でも追い付けない。くそぉ　素早さでも負けてるのか。俺様男の姿が消えた。左折して銀行に入ったみたいだ。
丁度いいからこのまま待ち伏せしよう、と決めて俺様男のあとに1人が入ったのを見届けてから私はドアの前に貼り付いた。

そしたら、

バンッ　っておっきな音がした。

なにかなぁと思ったら赤い飛沫、血……？　それと、……銃？

私はあわてて携帯電話を取り出した。開くか？　耐えられるか？　あやしいひかりも見せられていないのに　（どちらかと言えば威張るか？　いや　超音波？）　混乱している私は下手なお手玉みたいに携帯を取り落としそうになりながら、画面を見ずに１１９をプッシュした。……当然のように消防署に繋がった。

なんとか警察に通じて最初はいたずらだと思われかなり泣きそうになった。だけど銀行の中から2発目の銃声が聴こえて来てからはあきらかに反応が変わった。

「ふう……」

なんだか一気に喋るのが久々過ぎてやり遂げた気分になった。私が喋る機会と言えば親にぼそぼそと小声でかパソコンと向き合っての独り言の2択だったのだ。

しばらくしてサイレンの音を皮切りにいろいろと騒がしくなって

きた。自動ドアの横にぺたんと座り込んでいた私は「離れて！」と退かされて立ち入り禁止にされてしまった。

「むぅ……」

先に居たのは私なのに！　憤りたかったが銀行強盗さんが私より先なので諦めて野次馬の最前列を位置どってみた。店内は濁ったガラス越しに少しだけ透けて見えるけど俺様男の姿は見えない。彼はどこだろう？　はっ　まさかこの事態を内側から解決しようと単身で潜んで……

妄想を先行させて事態を楽しんでみたけど3発目の銃声が聴こえて潜んでいた彼が撃たれたイメージが浮かんでしまって、急激に萎んだ。どこかの窓ガラスが派手に割れたみたいだ。

慌てた警察官が私達を追い払おうとする。野次馬は警官さんの都合などまったく顧みずに下がろうとしない。ふてぶてしい限りだ。私も含めて。それでも無理矢理に押されて下げられる。むぅ、横暴だ。

警官が抵抗する私の肩を押した。倒れ込みそうになって私は野次馬の1人に支えられる。後ろを振り向いて礼を言った。それが大学生ぐらいの男の子だったので私は俺様男を諦めてこの野次馬の中から逆ナンすればいいじゃないかといまさらながら思った。

だけど私は逆ナンのために動かなかった。というより動けなかった。いまさらながら自分がかなり人混みが苦手だったことを思い出す。

周りに大勢の人がいることを認識すると急に目眩がしてきた。なんとか人混みから少し外れて座り込む。

くらくらする。俺様男が出てくるまで耐えられるだろうか。座り

込んで一応野次馬を厳選してみる。ふむ、個体値以前に種族値レベルで俺様男と勝負になっていない。妥協に苦しい。そういえば私は最低でも３ＶＵ以上じゃないと納得しない贅沢さんだった。↑スルー推奨。

視線を下げる。自分の足元を見た。灰色のアスファルト。今度は上げた。雲１つない青空。……私は何をやってるんだろう？　いつもみたいにＤＳを片手にネットに繋いでるほうがまだ有意義じゃないだろうか。運命が私の邪魔をしているのかな。

「輩の……野郎！　……奴！　ミト……ア！」

中からなんだか怒鳴り声が聴こえて来てビクッとした。声の高さから察するにさっきの中高生だろうか？　銀行強盗相手によく啖呵を切るものだと感心する。

それから銃声がもう一発。撃たれたのかなぁと思ったけど野次馬からは悲鳴より嬌声。血飛沫が舞えばああはならないだろう　と勝手に思った。だって私がそうだったからだ。

……あれ？　急に人混みが割れた。なにかが飛び出してきたみたいだ。離れて　と怒鳴りながら警官がそれを拾う。一瞬だけ見えたのは……　拳銃？

数秒たって俺様男が悠々と中から闊歩してきた。警官が即座に彼を取り囲む。２、３こと彼がなにかを言うと彼の元に二人ほどを残して銀行内に警官が雪崩れ込んだ。

いましかチャンスはなさそうだ。その隙に私はくらくらする意識を放り投げてゆるくなった警備をすり抜けた。彼の元へ早足で駆け

て、言った。

「あの～逆ナンされませんか？」

「あ？　いいよ　そっちの奢りなら」

改めて見た俺様男の印象をバンギラスだなぁとなんとなく思った。

『ポケモン女　2』（後書き）

ポケモン用語の解説その２

・あやしいひかり、いばる、ちょうおんぱ

混乱に関する技。対戦での使用率は総じて高くないがダブルではいばキー（またはいばラム）というコンボが有名

・ＶＵ

同じレベルの同じポケモンでも捕まえたときに能力に若干の差違がありその最上値をＶ、１つ低い値をＵという。なんでＶＵって言うかはたしか２進法がどうたらこうたらだったと思う（蹴

３ＶＵは「ＶかＵの能力値が合わせて３つ」という意味。

『銀行強盗の共犯　1』

銀行強盗の計画を明かされたときには胸が踊った。

俺の人生はそのことごとくが惰性だった。

基本的に性格が善良な俺は友達もそこそこに多く高校、大学と結構いいところに入りアルバイトや私生活も充実していた。それなのに、何一つとして不自由がないはずなのに堪らなく自由ではなかった。

金が欲しかった。大学生がバイトで得られるよりも遥かに大きな額の。そうすれば平凡で怠惰な生活から一時でも脱け出せると思っていた。失敗してもそれはそれで特別な瞬間は得られる。俺にとってそれは刑務所で暮らす十数年を犠牲にしてでも得てみたいモノだった。

俺の役目は被害者を巻き込むであろう一般人の動きを牽制することだ。例えば携帯電話。しかしそれは一般人を傷付けたくないがためでなく単に弾薬を節約したいだけというところが救えない。

俺はわざと妙に古臭い着信音を鳴らした。拳銃にそれを制させることで周りの人間の連絡させる意思を削ぐためだ。ちなみに古臭い物をあえて選んだのは三条は俺以外が鳴らした場合は一度目でも即座に当てるつもりだったからだ。あとは臨機応変に、あくまで被害者として振る舞え。とそう指示されていた。

しかしそいつの存在には俺は内心で苦笑いするしかなかった。

「寝るっ！」

大声でそう言って固い……えーっとリノリウム　だっけ？　の床に寝転がったそいつはただでさえ失敗して苛立っている三条の沸点に薪どころか油を放り込んだ。度胸ありすぎるだろ、こいつ。

「おい、そこのお前」

案の定、三条が俺を呼ぶ。

「な、なんですか……？」

被害者の振りをした俺はあらためて怯えた様子を作る。丁寧語は俺の基本口調なので顔見知りでも無理なく使える。思えば三条はそういうところを気に入って俺を共犯に選んだのかもしれない。

「そいつを叩き起こせ！」

男に向かっていきなり銃声が飛ばなかったことに内心で安堵する。小説内ならともかく現実の血はやはり好ましいものではない。

俺は恐る恐るといった風を装って男に近づいて肩を叩いた。

「起きたほうがいいですよ」

男は心底眠たげな顔でゆっくり身体を起こす。

「……お前、携帯鳴らしたやつだよな？」

男は小声で言った。切れ長の目で睨まれてびくっとする。なんて

いうか、男の目は弱っていなかった。この状況でも。人質にされているというのに。

「共犯か？」

いきなりズバリ言われて答えに詰まった。男はあきらかに確信を持っていた。なぜだ？　俺は何かミスをしたのだろうか……？

「ま　だからどうってこともないが」

小声で言って大きく欠伸をした。俺はふと好奇心に駈られ、そして負けた。

「あんたのツレでしょう　あの子　随分落ち着いてますね？」

本当ならこのへんで銃声が鳴ってそうだけど俺だから、三条は撃たない。

「別にツレじゃねーよ」

男は微笑さえ浮かべて言い切った。バン！　うぉっ　調子乗りすぎた。ガラスが音をたてて崩れる。

「うるせぇよ」

三条が釘を刺して来る。それでも表情を変えない男に驚いた。それから小さく頭を下げて男から離れようとして、

「先輩の鬼ぃ！　悪魔！　ホモ野郎！　守銭奴！　ミトコンドリア！」

鼓膜が割れたかと思うほどの怒鳴り声が敷地内を割った。三条の注意も俺や男のほうにあっていて少年のこの抵抗は予想外だった。半泣きで狂ったように喚き続ける。

「この、ガキィッ」

片手で耳を抑えながら少年の頭を撃ち抜こうとして三条は、俺は腹部に異様な衝撃を覚えた。翔んでる？　なんで？　男が俺にタックルをかましていた。つかこいつ力がやたら凄い。柔道かアメフトでもやってたのか？　転倒させるようなそれではなく下腹部から掬いあげるようにして、ともあれ俺の身体は三条のほうへ吹き飛んだ。少年の頭に向いていた銃口が俺に向く。死んだ。確信した。三条は俺ごとこいつを撃つ。

バンッ！

一瞬だった。痛みはなかった。俺は倒れ込んだ。

――三条の上に。

へ？　嘘だろ？　どうやら三条の銃口はわざわざ、寸前で俺や男を避けたらしかった。リノリウムの床が砕けるのが横目に見えた。男は下に足を伸ばした。俺ごと倒れる三条の指を踏みつける。銃口が明後日の方向に向く。ついでにもう片方の手も。

男は足を交差させて三条の手から拳銃を蹴り飛ばした。少年がそれを拾って割れたガラスの外に放り投げる。

それで勝敗は決した。銃を失った俺達は抵抗する意味を失った。三条は男を殴り倒したいと思ってはいるようだが踏み潰された両手の指がおかしい。痛みでまともに握れもしないようだった。

「……トイレ行きてぇ」

呟いて男は自動ドアを潜って出ていった。少年が悪態をつきながらあとを追う。もう何もする意味はなかった。三条も自嘲気味の笑みを力なく浮かべている。

「なんで撃たなかったんですか」

三条はちっ　と舌打ちを一つ。それから微妙に恥ずかしそうに顔を背けて言った。

「だってダチだろ　俺ら」

警察に捕まった三条は俺を売らなかった。また男も聴取の際に俺の名前　（知らないんだろうけど）　を出さなかったみたいで俺自身は呆気なく無罪放免となった。

共犯である身からすれば非常に肩身が狭いし三条にも申し訳なかったが正直なところありがたかった。俺は一瞬でも特別を得ることが出来て満足とまではいかないが刺激はあった。平凡で退屈な生活への回帰をしばらく容認できる程度の。

半ば無意識にそう思ってから「あぁ、あれはやっぱ特別な瞬間だったのか」金なんか無くとも探せば見つかるのだと知った。……ま

た探してみるか。俺の人生を彩ってくれる“特別な瞬間”を。

「……大学行くか」

事情聴取はそんなに時間が掛からなくて午後からの講義には意外と間に合いそうだった。俺はここから程近い大学のほうへ足を向けた。高揚と落胆が混じった奇妙な気分だった。

電話がかかってきていた。俺はいま犯行用の物と携帯電話を2台持っていて普段使っているほうは音を消していたので気付かなかった。親と、大学の友人からだった。

親にはメールだけ送っておいて友人にはかけてみる。

「もしもし」

『おう　マコ、無事だったか？　いまどこだ？　大学の食堂にいるから来いよ』

欠片も心配してなくて単に俺から話題の種を求めるだけの友人の声をなぜかやたらと愛しく感じた。

行こうと思ってたとこだよ、と通話を切った。

『立てない哲学者　3』

「あんた、マコの知り合い？」

振り返ったワンゼク男が言う。マコ？　僕は首を横に振って画面端に小さく映る隆弘を指差す。

「いや、僕の友達はこの人」

なんだか警察官の人に取り囲まれてる。え、まさか犯人じゃないよな？

「へ～」

さほど興味が無さそうに言って「あ　こいつがマコね」と少し遅れて出てきた人を指差した。

「いいなぁ　ミス研としては銀行強盗に巻き込まれる経験なんて貴重だよなぁ……」

ワンゼク男は遠い目をする。右足を挫滅する経験も貴重だよ。って微笑んでみようかと思ったけど、どん引きされるのがオチだと思い直した。

「右足を切断される経験も貴重よね」

そばを啜り終えた彼女が言った。ワンゼク男が目を見開いてその

言葉に驚く。

「うん　やっぱり人生これぐらいは経験しとかないとね」

僕は彼女に微笑んだ。ワンゼク男は狂人を見る目になる。僕はともかく彼女をそんな目で見るな　！って怒鳴ってやろうかと思ったけど彼女扱いするなと彼女に怒られそう　（多分誤記ではない）だから止めた。

「あー　わかる、気が、する……」

ワンゼク男の言葉は尻すぼみになる。未知と向かい合う姿勢は素晴らしいけど、どう足掻いても届かない領域は存在するのだと理解したほうがいい。

「ミステリー研究会なんだ？」

僕は話題を戻すワンゼク男の本分に戻す。

「ああ　あきら、篠上　彰　（しのかみ　あきら）　だ、二回生」

……どうでもいいけどなんで小説とか漫画の登場人物って名前を2回言うのかな？　逆にわかり辛い。緊張してるのか？

「日向　大地、よろしく　ちなみに一回生」

篠上さんの視線が一瞬彼女に動いた。

「えっと、そっちの彼女は俺のこと知ってるよな？」

ギロリ、と彼女の黒目が篠上さんのほうに動いた。その顔もキレイだと僕は思うけど篠上さんはそうは思わなかったらしい。表情が若干強張ってる。

「知り合い？」

睨むだけで拒否はなかったから僕は僕の都合のいいように話題を進めようとした。

「ああ　初日にミス研に見学に来てた」

へぇー　意味ありげに彼女を見てみた。ツンデレのツンの部分を全力で強調していた。

脳内でサライの曲調で流す。いつかデレる。いつかデレるー。

「その場で入会の届け出してたと思うけど、あ　会長にはあってなかったっけ？」

「あ　僕も入るよ」

彼女ははっきり眉に皺を寄せた。そんな顔ばっかりしてたら老後に後悔することになると心配になる。

「あ…ああ、じゃあ講義終わってからもっぺんここに来てくれ　案内するから」

「……」

午後の講義を終えても彼女は不機嫌なままだった。一言も口を聞いてくれない。ふむ。もっとこっそり入ればよかったかな？

「食堂、行こうか？」

「……」

促しても彼女は仏頂面のまま足を動かそうとしない。

んー……　どうしようかな。

「あ　お蕎麦の美味しい店しってるんだけど」

釣ろうとしてみた。流石に苦しいかな　と思った。

「……どこ？」

僕の知る限りでは過去最大級に食い付いた。

「このあと一緒に行こうか？」

「場所だけ教えて」

「わかり辛いところにあるんだ」

彼女はグッと唇を噛んだ。そばの誘惑と戦ってるらしい。

「……行く」

短く言った。

食堂に行くと篠上さんと篠上さんがニュースの中で指をさした男の人がいた。外見を描写しておくと黒髪で比較的に優しい顔つき、背はそんなに高くない。……なんだか隆弘の真逆だな。

「こいつもミス研、羽鳥　誠」

篠上さんが僕らを「新入生」と簡潔に紹介する。どうやら名前を覚えられていないらしい。僕は別にいいけど。

「こいつとひとくくりにしないでください」

……どうでもいいけど“ひとくくり”って漢字変換しようとしたら“秘匿栗”って出てきたんだけどどう思う？　ちなみに僕はこれをＰＮにしようかなぁ　と思った。

ミステリー研究会の部室は三階にあるらしかった。

「えっと、じゃあ羽鳥はそっち頼むわ」

エレベーター前に僕と羽鳥さんを残して篠上さんは階段を彼女と登って行く。

たしかに彼女が普段から使うなら階段だ。エレベーターは基本的に一般の生徒の使用は許可されていない。だけど僕だって彼女と一緒がいい！　……というか篠上さんが彼女と二人きりになりたくてそうしたような感じがして「人の女に手を出しやがって」って気持

ちになった。

「じゃあ、行きましょうか」

羽鳥さんが言って僕は我に返る。開いたエレベーターに乗り込む。三階のボタンはすでに羽鳥さんが押していた。ドアが手早く閉まる。丁寧そうな人だなぁ　という印象を僕に与えた。微かに親近感を覚える。エレベーターの上下動が始まる。

「えっと……、ニュース見てたんですよね」

「あ、はい」

「何も訊かないんですか？　いや、訊いて欲しいわけじゃないんですが大学ついた瞬間に質問責めにあってそうしない人がちょっと珍しくて」

ちょっと苦笑する。あぁ　まあたしかに訊きたいことはあるな。

「じゃあ、銀行でやたら態度の大きい俺様男に会いませんでしたか？」

「……もうちょっとなんか特徴ありませんか？」

答えながら羽鳥さんはなぜか思い切り顔を引きつらせた。

「特徴、うーん　外見も内面もこの世のすべては俺より格下って感じのプライドの塊みたいなやつですけど……」

「それでわかるのもなんか変な感じですけど多分会いましたね」

上下動が止んだ。羽鳥さんの顔が正面を向いて僕から見えなくなる。
階段近くの白い壁際にいつも通りの不機嫌な無表情の彼女を見つける。篠上さんが何か話し掛けてる。あれがいつもの僕の姿なんだなぁ　と微笑しようとしたけど嫉妬の炎に表情を焼かれてぎこちなく固まった。

「行こう」　羽鳥さんがおそらく呆れ顔で言う。

「ん、おぅ」

微妙に苦い顔になって篠上さんはちらりと彼女を見て僕を見て、それから歩き出した。

ミステリー研究会とは名ばかりのだべり系サークルである。

……と僕は思っていた。なんだ、この部屋。本の、要塞……？
壁一面が本棚で隙間なく埋まっている。

「ようこそ、我が城へ」

発言者はコーヒーカップを片手にくるりと椅子ごと振り返ったホームズ気取りと思われる女の子は「あっち！？」コーヒーをこぼして悲鳴をあげて飛び上がった。
というか、なんだ？　縮尺狂ってないか。発言者の身長は車椅子の僕と視点の高さが大差ない。

「あれがうちの会長　アメリカで飛び級してうちに転校してきた帰国子女で１４才……「こぉらぁぁ　自己紹介はあたしがするのォ！」

女の子は会議室みたいに置かれた机と椅子を迂回してこちらに来て正面から僕を見る。ニヤリと笑った。ニコリではなく明らかにニヤリだった。おそらくは視点が僕より上なことに優越感を持ったんだろう。非常に好感が持てる。僕は笑みを返した。

それから女の子は彼女の前に立った。身長差は目算で２０ｃｍ、態度の大きさは対々かな？

「あんた、アコでしょ？」

と女の子は言った。「そうよ」と年下相手でも彼女は無表情を崩さない。ってか女の子はなんで彼女の名前を知ってるんだろ。

「ふーん」　値踏みするように視線を這わせて不機嫌な顔で「私には未来があるもんね」と小さく呟いた。僕と彼女の中間に向けて、

「あたしは中村　あい、名前は普通でしょ？　向こうじゃ“ラブ”って呼ばれてたからよければそっちで呼んで　あんたは？」

「日向　大地」

「ふーん……　日と地、サンとガイアどっちがいい？」

「……サンかな？」

助けを求めるように羽鳥さんを見た。

「ちなみに俺はフェザーで篠上はグラス」

……いま遠回しに諦めろ　と言われた気がする。

「アコはアコね、アコースティックのアコ」

「ちなみに大橋は？」

「フレンドよ」

……天才って、わかんないな。

むしろ凡人にわかんないからこそ天才なのかな？

「今日は解散でいいや　新歓コンパをどうしよっかって計画を考えるのに私が忙しいから　あ、名簿に名前だけ書いて」

渡された紙に『ラブの僕（しもべ）たち』とあって少し可笑しかった。「ラブの僕」か。自分の名前を書き足すことに不思議と抵抗はなかった。

僕達は並んで校門を出た。

「忘れてないわよね？」

「もちろん、僕が君とのデートの約そ」うち下ろし気味の握り拳が米噛みにめり込んだ。

「どこにあるの？」

僕は頭を振って意識を戻す。

「僕の母校の近く　大衆食堂って言うのかな？だけどかなり評判だよ」

「ふーん……」

彼女はたかが食堂か　って感じだ。でも帰る、とかは言わない。よかった。ほんとは僕が知ってる店で蕎麦を出してるとこなんてそこしかないのだ。僕は嫌いだし。

「……ねぇ」

「ん？」

「いつもみたくなんか語ってよ」

「え……　いつも聴いてなかったんじゃ……？」

はぁ、と彼女は一度大きく息を吐いた。

「『“にんげん”はなぜ奇形を守ろうとするか』、『“にんげん”がなぜある種の孤独を好むか』、『“にんげん”は他の動物とどこが違うか』」

「……驚いた」

この2週間で僕がテーマにした課題に相違なかった。

「ねぇ」

聴いてくれてるとわかったら俄然やる気が出てきた僕であった。

「じゃあ取って置きの話をしようかな」

僕はそれっぽく人差し指を立てた。

「トゥス」

率直に噴いた。……あ　これ言ったのは僕じゃなく彼女である。

「何いまの？」

「あなたが言わなさそうだから言ってみようかと思って」

一通り笑い終えてから僕はコホン　と咳払いをした。

「“にんげん”は地球に殺される」

『俺様男　2』

そいつが共犯者だということはなんとなくわかっていた。
はじめに感じた違和感は着信音だ。男はあきらかに“ふつう”の大学生のイメージを地で行く人間だった。それなのに今時、着歌も使ってないなんかあり得ない。……と信也や大地が言っていた。何度も言うが俺は携帯電話を所持していないのだ。
もう１つ、俺が横になったとき隣には４０代と思われる中年の女性がいた。大学生風よりもあきらかに御しやすい相手だ。位置的にも適任のはずだった。なのに、主犯は大学生風を選んだ。
まっ　確信ではなかったが確信のように振る舞うのは得意だった。ブラフは麻雀でも重要なテクニックだ。

「先輩の鬼！　悪魔！　ホモ野郎！　守銭奴！　ミトコンドリア！」

……おいおい、あいつ。自分のおかれてる状況が把握できてるのか？　安西の怒鳴り声を聞きながら俺は踏み込んでいた。共犯の男の身体を持ち上げるように低くタックルして主犯のほうへ弾き飛ばす。
盾、になるかは疑問符だがまあ素で突っ込むよりはましだろう。思いの外に共犯男は軽く、そして都合よく主犯を巻き込んで倒れてくれた。拳銃がこちらに向きかける。踏みつけて制す。ばきりと指の骨が軋む音がしたが気にしない。自業自得ってやつだ。
ちゃっかり犯人の手を逃れた安西が拳銃を拾い上げて外に放った。それでケリがついた。
……なにやってんだ俺は。頭の隅で考える。なまじそういう光景を一度見てるだけ二度目を見るのは御免なのか、単純に安西を助け

ようと思ったのか。大地の顔がちらついたため前者だと断定した。
ともかく犯人×2を放って外へ出た。完全に昼頃だった。強い日差しが眠い瞼に刺さる。警察に囲まれる。中の様子を簡潔に説明して聴取に連れて行かれた。
その際なぜか女が警備を潜り抜けて来た。咄嗟に美人と値踏みする。

「逆ナンされませんか？」

「あ？　いいよ　ただしあんたの奢りなら」

その女が行きにスレ違ったやつと同一だと思い出すまで少し時間がかかった。

なんでこんな危ない真似をしたのか？と訊かれて俺はこう答え刑事一行を噴き出させた。

「便所行きたかったから」

そう長くない聴取を終えて律儀に待っていた女と合流した。流石に人質になっていた安西の聴取はまだしばらくかかるらしい。待っていてやる義理もないため女とファミレスに向かった。

ファミレスってのは学生レストランとでも名前を変えるべきじゃないか？
少なくとも俺が逆ナン女と入ったファミレスにはファミリーより

も高校生が多かった。むしろ学生しかいない。テストか何かで昼までだったとかそんなんだろうか？

安あがりな洋風の店内を通って席に案内され座る際にポケットに入ったままの金の重みをふと思い出した。まっ　奢りだしいまは必要ないか。メニューを開く。腹はそこそこ減っている気がしたがそれ以上に眠かった。店員を呼び止めて「ドリンクバー」とだけ言い説明を待たずにコーヒーを取りに行く。「私も」と控えめに聞こえて女がついて来るのがわかった。なんだか顔のわりに存在が希薄なやつだな……

「なぁ」

振り返って声をかけた。

「あ、はい」

足元を見ていた女が顔を上げる。

「あんたから逆ナンされたことにいまさら凄まじい違和感を覚えたんだが」

ファミレスまでの道中一言も喋らなかったしな。

「あ　やっぱりそうですよね」

女は頷いて俺の目を見たがすぐに逸らした。俺はその場でコーヒーに口をつける。……不味い。もう一度同じ物を入れてガムシロップとコーヒーフレッシュを取って席に戻った。女は林檎ジュースを淹れながら「これがほんとのきのみジュース」とかほざいている。

ガムシロップとコーヒーフレッシュを混ぜてもう一度飲む。しかしやはり不味い。

「……なんでだ？」

「ナンパのことですか？」

「ああ」

「むぅ……　ちょっと待ってください」

女はぐびぐびと小さく音を立てて林檎ジュースを勢いよく減らした。ぷはっ　と息を吐いて、

「カビゴンが好きなんです」

と、言った。

……は？

「ウルトラマンかなんかの怪獣か？」

「それカネゴンじゃありません？」

「わからん　とりあえず話を進めてくれ」

「え　終わりですけど」

……

「じゃあなにか？　俺はそのカビゴンとやらに似てるのか？」

まっこと不名誉なことに。

「いえ　あなたはどっちか言うとバンギラスです」

合計種族値は６０高いです。と意味不明な言葉をぽつりと呟く……とりあえずこの女が俺にとって異世界の住人なことだけはわかった。

「つまりは私は引きこもりなのでそれを変えたくてあなたに声を掛けた次第であります」

女は林檎ジュースを飲み終えた。カビゴンどうたらこうたらよりはまだ納得がいった。

「そういうわけなのでわたしとお付き合いいただけますか」

俺はコーヒーを噴いた。

「大丈夫ですか？」

女は緩く首を傾げる。どうも俺にはこの女の思考回路がよくわからない……　わからないのだが、

「あのさぁ……　つまり別に俺じゃなくてもいいわけだろ？」

「むぅ　そうですね……　種族値が５４０以上で４ＶＵ以上の高個体で遊びに連れて行ってくれるならかな」

乱数調整はよくわからないんですよね　とまた呟く。女の呪文にはもう耳を貸さないことにする。女はもう一度首を傾げて「いけませんか？」と言った。

「いや、大歓迎」

俺は即座に笑みを見せた。重い女は苦手なのだ。誰でもいい、ぐらいのほうがむしろ好感が持てる。それから「ただし、あんたの奢りならな」と付け足した。

『ポケモン女　3』

「ただいまぁー」

玄関を開けると風が吹き込むのを感じる間もなく「どこいってたの！？」お母さんが飛んできた。私は何か言おうとしたけど遮られて抱きつかれる。なんだかくすぐったい。

「あぁ……　もう携帯鳴らしても出ないしあんたは……　大丈夫だった？」

「うん、全然大丈夫」

ってゆーか心配するなら引きこもり継続させてくれたらいいのに。お母さんとしては３０分もすれば帰ってくると思ったのかなぁ。……思ってたんだろうなぁ。

「あ、来週も出掛けるから　遅くなると思う」

予測通りお母さんは絶句した。むぅ……　そんなに娘が脱・引きこもりロードを歩みだしたことが信じられないのだろうか？　その横をすり抜けて靴を脱ぎお風呂場に直行した。シャワーを浴びながら、ふと浮かんできて口ずさんでみた。

「そしていまナツメロのように聴くあなたの声はとても優しい　スピーカーのなかいるようなあなたの声はとても優しい」

あぁ、うろ覚えだけどなんかジンと来るなぁ　この曲。私、ジョン・レノンなんか全然知らないけど。
……今度はカラオケに連れてって貰おうかな？　上がったらＹｏｕＴｕｂｅで聴いてみよう。

私の怠惰な引きこもりライフをお送りするのもなんなので彼と約束した3日後までジャンプしてみる。――つもりだったのに、不測の事態によってジャンプは失敗に終わった。

その日から2日後に、お母さんが再婚を目論む相手を家に連れてきた。整髪料でぴっちり髪を整えていてスーツ姿、鼻筋が通っていて眼鏡越しに見える目は大きい。カッコいいって言うよりはキレイやハンサムって言葉のほうが似合いそうな３０行くか行かないかの男性。……結婚詐欺かなんかじゃないの？　私は上から下まで彼を眺めてそんな印象を抱いた。マニューラと評する。獲物に対してはスゴく鋭い攻撃性の高いやつだ。
お母さんは１８で私を産んだらしくて３７歳らしい。大学生の子供を持つ母親としては若いし綺麗だとは思うけど……

マニューラと三人でご飯に連れてかれて、しきりに私に話しかけて、私はなんだか上の空だった。幸せそうな母さんを見てると結婚詐欺じゃない？、なんて言い出せなかった。その晩はなんだかひどく寝つきが悪かった。

そのせいで、

「おせぇ！」

開口一番でバンギラスは言に言われてしまった。１２時ぴったりに待ち合わせていまが１時半であることを考慮するとむしろ彼がここに居ること自体が奇蹟に等しいかもしれない。

「ふ、２人の愛を確かめたくって！」

「寝癖隠してから言え」

あぅ……　しっかり見抜かれてる。バンギラスはものすごく深いため息を吐く。よく見ると彼の髪も若干ボサボサだった。彼も寝坊したんだろうか？

「まあいい　行くぞ」

「あ　はい」

そういえば駅なんて何年振りだろう？　ついキョロキョロしてしまう。パチンコ屋の横に美容院が、鍵屋の隣にパン屋があって統一性がないのがなんとなくおかしい。

「昼飯、なに食う？」

「マクドナルドでいいんじゃないでしょうか　Ｗｉ－ｆｉ繋がってるし」

「わい……？」

「簡単に言えばネットです」

「はぁ……？」

それとなく彼は私の持ち物に視線を回す。ポーチバッグが1つだけである。中には財布の他にニンテンドーＤＳが入ってる。

「……おぉ！　電車だ」

ガァー　と変な音を立てて行く電車に不覚にもテンション上がった。

「電車が珍しいのか……」

「あ、はい」

突っ込まれて少し困った。電車を見たのが年単位前だなんてどっからどう考えたって引きこもりの中でも重症な人だ。

「……まあいいか」とあっさり流してくれる彼がありがたかった。

横断歩道を渡ってマクドナルドに入る。昼間だけど平日なのが幸いしてか人はあんまり多くない。助かった。人混みに目眩を起こす体質なのである。

「おい」
「はい？」
「何にするんだ？」
「あ　じゃあ……　月見バーガー」

彼が噴いた。

「お客様、申し訳ございませんが月見バーガーは期間限定メニュー

となっておりまして現在は販売を行っておりません」

店員さんが丁寧に教えてくれて私は逆に赤面する。

「じゃ、じゃあテリヤキで」

「かしこまりました　合計で９１０円になります」

あ、お金は私が出すんだっけ？　財布を出そうとしたら先に一万円が卓上に投げられた。

９０９０円と番号札と「しばらくお待ちください」という決まり文句を受け取って彼は適当な席に腰を下ろした。私もそれに続く。

「あの、お金「ヒモみたいでカッコ悪いから俺が出す」

机に肘をついて特におもしろくもなさそうに言う。きっと“かっこよさ”は彼の命なんだろうなぁ。ポロックあげたい。あ　そうだ。ポーチからニンテンドーＤＳを出す。

「……」

彼が私を見る。嫌悪感とかはなくてどっちか言うと好奇心が先立ってるみたいに見える。ポチポチ、と。

「ハイ、これがバンギラスです」

ちなみにバンギラスとは薄い緑に黒い模様のある怪獣っぽい岩のポケモンである。私のお気に入りの一匹だ。

「……苔でも生えてんのか？」「なっ！？」「だって岩で緑色なんだろ？」

言われてみれば。他の岩タイプはだいたい灰色か茶色だし。……むぅ。

「バンギラスのことを悪く言わないでください！」

「あ……あぁ　悪い」彼は思いの外に素直に言った。

「あ　こっちがカビゴン、このまるっとしたフォルムが堪らないのです」

彼は苦笑しながら私を見た。カビゴン見ろよ、って言おうとしたら店員さんがセットを1つと私のテリヤキバーガーを持ってきた。

「ごゆっくりどうぞ」

営業スマイルが素晴らしい完成度だった。この人はキリンリキかな？　彼がポテトをトレイの中に広げる。

「いいんですか？」「ああ」「じゃ遠慮なく」

……相変わらず彼はじっと私の顔を見ている。

「照れます」このハンバーガーみたいに。

「もっと照れとけ」　むぅ。

「あ、飲み物1つなのにストロー二本ありますね」

「間違えたんだろうな」

店員さんのほうに視線をやると目があった。やっぱり見事な笑顔。あれを見るとなんだかストロー二本はわざとじゃないかな？　って思う。

「……やります？　ストロー二本刺して、両側からずずずーって」

「……」

彼は無言でポテトを摘まんだ。私も彼に倣う。それからテリヤキバーガーをパクり。

「喉が渇きました」

「……」

テリヤキを呑み込んでそれの紙製の袋を破り蓋を取ってストローを刺す。そのまま彼を待つ。仕返しにじー　っと見つめて。

「羞恥プレイで俺を殺す算段かなんかか？　これは」

苦笑しつつ結局彼もストローを刺した。　で、二人でズズズーって。

そのあと今日のプランのことを話した。彼は別になんでもいいけどそっちもそうなら適当に決めるが　と言った。

私はカラオケに行きたい　と小さく手を挙げて主張。

カラオケねぇ……　小さな声で言って彼は一瞬だけ渋い顔になったが特に反対はしなかった。食べ終えて、マクドナルドを出た。

「あれは？」「ピカチュウ」「そっちのおっさん」「カバルドンですね」「あのケバい人」「ミルタンクでしょうか」「向こうの女子高生風」「ミミロップです」

カラオケボックスまでの道中はこうやって時間を潰した。通行人は意外にバリエーション豊富で、飽きない。

「ふーん」　彼はやっぱりほとんど知らないみたいで興味なさげだ。

「なんか知ってるのありました？」

「ピカチュウだけ」

さすがにピカチュウぐらいは知ってたか。

カラオケボックスに入って会員証を作るか訊かれ彼が名前を書いているところで初めてお互いの名前を知らないことに気づいた。

「そうい」「や」「えば」

同時に発声して顔を見合せくすりと笑う。

「真島　隆弘だ、あんたは？」

「小畑　早紀です」

アルバイトらしき男の子が変な顔で私達を見ていた。

彼がカラオケに決めたとき苦い顔をした理由はすぐにわかった。

選曲が、古い。私も大概のはずだが彼のは半端じゃない。B……、ダメだ。高校はほとんど不登校なんだった。英語はわかんない。でも歌自体はすごく上手だった。

私はあの曲を入れてみた。『拝啓、ジョン・レノン』「お？」彼が反応する。

「この曲、知ってるんですか？」

「いや、つーかさっき俺が歌ったのがビートルズのカバーなんだが」

「ビート……？　あ、」

始まったので歌った。

“ビートルズを聴かないことで何か新しいモノを捜そうとしてた”

この歌詞を歌ってようやく気づいた。多分ジョン・レノンさんのバンドなんだ、ビートルズって。

彼は次の自分の曲を入れるのも忘れて目を閉じてじっと聞き入っていた。

拝啓、ジョン・レノン

あなたの声はとても優しいよ

「……悪い、もっぺん歌ってくれ」
彼は照れ臭そうに言った。

『銀行強盗の共犯　2』

……夢か

重い瞼を開く。嫌な寝汗をかいていた。もう見慣れたはずの無秩序なコンクリートの天井がひどく虚しい。

こんな風に思うのはきっと夢に兄貴が出てきたせいだろう……

「……バイト」

半身だけ体を起こして傍らにあるはずの携帯電話を手探りで探す。充電器の線に触れた。それを辿って掴む。

９時２１分、少し寝坊。しかしまあバイトは１１時からだからシャワーを浴びる程度の時間は充分残っていた。

「マコぉ　起きたの？」

台所　（と呼ぶほどのスペースはないが）　から沙織が俺を呼んでいた。そういえば昨日は二人で少し飲んだんだっけ……　計画性ないな、俺。

「うなされてたけど、変な夢でもみたの？」

「いや」

沙織は本当に心配そうだった。そんなにひどいうなされてたをしていたんだろうか？

「慰めてあげよっか？」

沙織は艶めいているのに下品じゃない、おどけるような声と笑みを見せる。沙織のこういうところが俺は嫌いではない。

「いい、そんなに時間もないから　シャワー浴びて来るよ」

「ハイハイ」

少し熱めの湯を浴びる。そういえばあの日も雨だった。嫌でも思い出してしまう。兄貴と決別した日。“特別”を手にしていた、俺の知る誰より家族思いで俺の知る誰より邪悪だった兄貴のことを。

「……沙織？」

浴室から出ると彼女はもういなかった。朝食と書き置きがあった。

「実家に帰ります」……真面目なのかふざけてんだか。

「いただきます」

食パンとベーコンエッグだけの手軽な朝食をありがたく思った。

「おはようございます」

俺がバイトをしているのは駅前のマクドナルドだ。平日ならばひどく不真面目な先輩と店長の三人でやっていける程度のさびれた店。

駅近くなので知人と会うことも少なくはないがそいつの登場を俺は予期していなかった。かなり焦った……

「ダブルチーズバーガーのセット　飲み物はアイスティー」

銀行で会った男だった。女連れだった。引き吊りそうになる顔を無理矢理接客用の笑みに変える。隣の女はテリヤキを頼んで俺はレジに９１０円を打ち込む。卓上に万札が投げられたのがほぼ同時だった。……ポケットのうちにちらっと見えた１０数枚の万札が男の存在を更に不気味に思わせた。

金輪際、関わりたくない。お釣の９０９０円を渡してやる気のない先輩を見た。ｉＰｏｄで音楽を聴いていた。畜生……　ハンバーガー２つとポテト、それからアイスティーを盆に乗せて嘆息しながらストローを掴んだ。

「ごゆっくりどうぞ」

こころにもない決まり文句を言いレジに戻った。なんとなくあの男が気になって横目に見ているとアイスティーにストロー二本を挿して二人で飲んでる。……二本入れたのはおそらく俺のミスだが人目をはばからずにあれをやって見せるバカップルっぷりに度肝を抜かれてぎこちなく笑みを浮かべたまま固まった。

客入りは少ないながらも夕方までみっちり働かされて店を出た。これからミス研の新歓コンパがある。……またラブがハメを外すんだろうな、去年は俺が犠牲になったんだよなぁ

うつむきながら気持ち悪くにやつく顔を隠して歩いていると「誠か？」スーツ姿の長身の男に呼び止められて足を止めた。

「っ……」

「やっぱりそうか」

今朝の夢は虫の報せか何かだったのかもしれない。

表情を隠すために笑みを張り付けたような、この男は俺の兄だった。

詐欺師の

『立てない哲学者　4』

新歓コンパは僕としては非常におもしろくないものだった。
僕はほとんど飲めないから相当に薄めた水割りをついで貰ったんだけど簡単な自己紹介を終えて乾杯したあとに即刻、

「なぁによぉ　あたしの酒が飲めないってゆぅのぉ」

……中村　あいが僕に絡みついてきた。背中側から首に腕を回して酒臭い息を僕に吹き掛けてくる。胸が背に当たってるがそこは１４歳、見事にペッタンコなので特に何も感じないのだけど。
羽鳥さんも篠上さんも苦笑して傍観してる。彼女はというと大橋をじっ　と見てるし……　というか店も１４歳に酒を飲ますなよ。

ちなみに僕がこのとき初めてあった残りの三人のうち二人は女性で彼女一筋である僕としては眼中にないので描写は省く。もう１人はあきらかに推理小説マニアらしくて鞄に数冊詰め込んでいる。彼からはどことなくシックな印象を受けた。なんとなく快活と卑屈が入り交じったような違和感がある。名前は妹尾というらしい。ここいらでは見掛けない名前だなぁと不思議に思った。

……というか問題は大橋だ。女性二人と彼女の視線を独占しながら楽しげに談話している。でもなぜか談笑という表現が似合わなかった。理由は自分でもさっぱりだ。

「サン～　あたしが飲ませてあげよっかぁ？　ほらぁ口移しでぇ」

なんて言ってあいが僕に　ぷちゅ　って。……マジでやりやがった。何度も言うが相手は１４歳だ。僕はロリコンではない彼女一筋だし、鼻を摘ままれた。息できな、　口内に唾液の混じった酒が流れ込んできた。無意識に飲み込んで、噎せた。

「きゃはははっ！」

あいが豪快に笑う。篠上さんと羽鳥さんが「お前も去年やられたよなぁ、あれ」「流石にビビったわ」と肴にして笑い友也達はノーリアクション。妹尾さんは「気にすんな、毎年のことだから」ペースを崩さずに酒をちびちび舐めている。

同じくノーリアクションだろうと予想して見た彼女は、

「……」

すごくこわい目付きで僕を睨んでいた。……なんでだ？　僕なんか悪いことした……？

足取りの覚束ないぐらいべろんべろんに酔っ払うあいを羽鳥さんが背負って居酒屋を出た。

「う～？　みんなの顔が梟みたいに回ってるよぉ～……」

「調子乗りすぎだ」

ポンと軽くラブの頭を軽く叩く。ラブが唸る。羽鳥さんはなんだか面倒見のいいお兄さんポジションを押し付けられてるみたいだ。

「ここで解散でいいよな？」これは篠上さん。

「君ら、駅は？」←妹尾さん。

僕と彼女は違う駅名を口にした。

友也は僕らの知らないどこか遠くの駅名を言って先輩二人に「泊まってきなよぉ」って羨まし過ぎるだろこいつ……

二人の誘いを爽やかにやり過ごし一足先に友也が別れる。それを皮切りにポツポツと足が動き出し最後に僕と彼女だけが残った。

「少し歩かない？」

……これ、夢？　もしかして僕、酔っ払って寝てるとかオチだったりする？　弱いのにラブに飲まされたし。

「いやなの？」

「滅相もない！」

彼女は駅に行くには少し遠回りになる道を選んで歩きだし僕はそれに並ぶように車輪を回す。

「……あなたって変な人よね？」

「ん、どこが？」

「車椅子なのに普通の人と同じように扱われたがるでしょ？　むしろ手伝われたりするのがすごく嫌そう」

……あぁ、そのことか。

「友達がね、怪我したんだ」

「……、？」

「僕が松葉杖をついててまだ義足のリハビリ諦めてなかった頃に階段で足を踏み外しそうになってね、だけど僕は踊り場に落ちただけだったんだ

でも慌てて駆け寄った友達のほうが一番上の段から落ちてさ　何針も縫った」

「ぁ……」　小さな悲鳴のような彼女の声。

「僕が片足じゃなかったら友達は怪我しなかったんじゃないか？もしふつうの人と同じように扱ってくれてたら……

そしたらなんか急に周りが僕を“片足がない人”って目で見るのが嫌になって来たんだよ」

「……ごめんなさい」

「いいよ、むしろ気を使わずに訊いてくれたことが僕はとても嬉しい」

やっぱりちょっと酔ってるかな？

「……じゃあ私の秘密も１つ話すわ」

「え」

「なんで私が人を遠ざけたがるのか」

「興味はあるね」

「友達の彼氏が私のことを好きになっちゃったの」

よくある話でしょ？　と彼女は微笑(わら)った。微細な痛みが滲んだ。

「裏切った、ってその友達はすごく私を責めた　その子は人望があって他の子に手を回して私は1人になったわ

それでも親切にしてくれた人はしばらくすると決まって“好きだ”、それを断ると“あんなによくしてやったのに”って言うの　お決まりすぎて笑えてきたわ……」

自嘲気味にそう言う彼女はやはり少し酔っていたみたいだ。「生きてくのに“にんげん”なんて要らないと思ってたの」と彼女は呟いた。

「手、疲れない？」

「別に大丈夫だよ」

「押してあげましょうか？」

恩着せがましい口調だったので逆に気にならなかった。

「そしたら君の顔が見れなくなる」

くすりと笑って「やっと慣れてきたわ」と言った。

ようやく駅のあたりまできた。

「お別れね」

「うん」

名残惜しい……　やばい。離れたくない……　僕は彼女の手を取ろうとした。

急に、彼女の体がビクンと大きく波打った。顔つきがみるみる青ざめる。

「どうしたの？」

「なんでもないわ」

とてもそんな様子には見えない。取り繕うように笑みを作るけどその笑みは不自然で歪なモノになる。

「さよなら　また明日ね」

早口に言うと彼女は車椅子の僕に追い掛けられない速さで駆け出した。

『銀行強盗の共犯　3』

その日の飲み会、俺は表情を消すために笑みを作ってひたすら相槌を打っていた。何をしてても兄貴の顔が過る。忘れるための酒は水のように喉を滑るだけだった。日頃の自分が口数が多い方でないことに初めて感謝した。

兄貴のことを考える。親父がリストラされたのが丁度俺の高校受験のために金が必要なときだった。両親も俺も途方にくれていた。そんなとき既に1人暮らしをしていた兄貴はどこからか出所のわからない金を持ってきた。

親父の就職が決まるまで兄貴はずっと金を寄越した。俺が大学に入れたのも兄貴のお陰だ。

金の出所を知ったのはほんの偶然だった。ある女性に兄貴と、間違われたのだ。彼女は詐欺の被害者だった。

警察沙汰になった。なんとか無実を証明出来たがそのころにはもう兄貴は姿を消していた。

結局店を出てもその事ばかり考えていた。「なーんか羽鳥さー今日元気ないよねぇ」

背負ったラブの酒臭い甘い息が鼻腔を擽る。俺が黙っているとラブはヒック　と喉をひきつらせてから「なんか相談してよぉ」と言った。

「ラブが気にすることじゃないよ」意識して優しい声を出すとラブは顔をしかめた。

「あたしがお子様だから羽鳥の世界にはいれたくないのぉ……？」

「そんなことないさ」
「だって羽鳥も含めてみーんなあたしと本気で話してないじゃーん」
それはきっとたかだか１４歳の女の子に自分の底を知られるのが嫌なんだろう。ラブは俺達より遥かに頭がいいから。
「ほら　もうすぐ家だ」
「やだぁ　羽鳥ん家に泊まるぅ～……」
ははっ　沙織に見つかったらなんて言われるかな。
「ほら　着いたぞ」
「みんな大好きだよぉ　だからあたしのことも好きになってよぉ……」
それきりスースーと寝息をたて始めた。
……
不安じゃないはずがないんだよな。６つも７つも歳上の人間ばかりに囲まれて、ちやほやされてても決して本心じゃなくて嫉妬とかプライドが少なからず見え隠れして……
「おやすみ、ラブ」
背負い直してそっと頭を撫でてやった。
インターフォンを鳴らすと使用人みたいな人が出てきたのでその人にラブを任せて、帰路についた。

特別ってのもいいことばっかりじゃないんだよな。わかってるつもりになっていたことに改めて気づかされた。
俺はどこまでも凡人だ。すぐに曖昧な夢を見て現実に打ちのめされる。手前勝手な理由で悪を肯定する。

違うんだ。特別だろうが悪は悪だ。
銀行強盗の共犯なんてやるべきじゃなかった。引け目があろうが俺は兄貴を糾弾するべきだった。

次に会ったときはもうあんなことは辞めるように説得しよう。それが俺だけに許された特別なんだろう。

『立てない哲学者　5』

彼女はこの頃、目に見えて窶れていた。化粧のノリが悪いのは一目で肌が荒れてるせいだとわかるし目の下の隈を隠し切れていなかった。

「どうしたの？」

訊いても、

「どうもしてないわ」

って言うかばっかりだ。こないだのあれはやっぱり酒に酔ってただけだったんだろうか……？

「その顔でそう言われても説得力ないかな」

「じゃああなたが原因だからいますぐ消えて」

それだけ言うと彼女は机に顔を伏せた。ちなみにいまは食堂ではなく講義中だ。僕は彼女の寝顔を横目に見て微笑してしまい彼女の苛立ちへのせめてもの埋め合わせに二人分のノートを取って置くことにした。ついでに自分のノートの端にペンを走らせる。

哲学とは何か？　――常識を難しく言ったこと。

さる有名かどうか知らないけど哲学者の言葉だ。これは哲学の本質をついていると思う。

哲学というのは人間が生きていくうえであきらかに不要なモノだ。

（点滴を含め）　食べずに生きている人はいないが哲学せずに生きている人はいる。哲学とはゲームやテレビ、小説や漫画と同種の娯楽。

これを理解していないと哲学は酷く傲慢になる。重要なのは娯楽性なのだ。

……「立てない哲学者」なんて粗筋にかかれたもんだから僕なりに哲学してみたが、どうだろ。私評としてはこんなに下らない物は他にないと言ったとこかな。

それから30分ほどして顔をあげた彼女がパチリと大きくまばたきした。同時に一粒だけしずくが落ちたのを僕は見逃さなかった。

「ねぇ」

感情のこもらない呼び掛け。いつもの無表情な感じすらしない。最近の彼女はやっぱり何か変だ。

「あなたってストーカー？」

「否定は出来ない」

「……そうよね」

それきり僕が何を話しても何も言わなくなった。

「最近ミス研にも出てないよね？」

もしかしたら僕がいないときに来てるのかな？　と思ってラブに尋ねてみた。

「たしかに、気になるわね」とラブは顎に手をあてる。

「だよね」と僕は本の要塞に視線を回す。羽鳥さんや篠上さんはまだ講義中かな？　部室には僕とラブしかいない。

「んー……　ミス研としては調べてみたいわね」

「リアルミステリーを追い掛けるのは警察の仕事でしょ」

まあ僕も知りたいけどさ。

「いーの　ひまだから」

ラブは退屈を示すように大きくあくびをした。

「君、いまなんか難しい論文やってるって聞いたんだけど」

「あぁ、あれ？　もうとっくに終わってるわ　小出しにして時間かせいでるだけ

私もキャンパスライフを楽しみたいもの」

ラブはさらりと笑う。……ほんとに天才なんだな。ラブって。普段がバカキャラなせいで今更になって実感が追い付いてきた。

「基本はやっぱり尾行よね　アコを捜しましょ」

にっこり笑って言った。

ラブと一緒に中庭に出た。ラブは友也や彼女とは別の意味で人目を引く。なにせ小さい。大学生にあるまじきサイズ。おそらくは１４０ｃｍ前後と言ったところ。

「サン！　ん～っと……　彼女が居そうなとこって思いつく？」

だけどそんなこと全く気にしていないらしくラブの声は大きい。

「蕎麦屋かな？　僕が教えたとこが気に入ってたみたい」

「ふぅん　アコはお蕎麦が好きなのね」

ピョンと飛び跳ねてラブは体ごと僕に向く。

「じゃあ、」ラブはそれ以上言葉を発っせなかった。僕がラブを掴んで僕の後ろに突き飛ばしたからだ。「……逃げろ！」現状が把握しきれずなんとかそれだけを喉から絞り出した。掠れて大した大声にはならなかった。ポカンとしていたラブが“それ”を見つけて青ざめる。

数歩離れたところで銀色の光を――ナイフが反射していた。こっちを見ている。標的は僕？　ラブ？　いろんな「なぜ？」が浮かんだけど考えてる場合じゃないと我に返った。ナイフを持った男が周りから隠しながら僕に近づいてくる。

咄嗟に左手で車輪を掴んで車椅子を止めると膝から下のない右足

の太股で車椅子を真後ろに押した。車椅子は左の車輪だけが掴まれているので不自然に円を描いて動く。男が迫る。焦らずに、急げ。念じて、

そのまま左足を一本を軸にして遠心力に任せ、車椅子を放り投げた。

がっしゃぁぁぁん！

命中を確認して、僕はそのままバランスを取れずに倒れ込んだ。アスファルトが固い。右肘に痺れが走る。おそらく斬れている。

「ッ……」

同じように倒れていた男が立ち上がる。片足のハンデのせいか、這ってすら動けそうもない僕よりもずっと反応は早い。標的がラブだとすれば彼女が逃げる時間くらいは稼げただろうか？

こころなしかフラフラしてるからすぐに追跡に出るのは多分無理だろう。微妙に安堵する。

男がゆっくりと近づいてくる。ナイフの存在をようやく把握した周囲が悲鳴をあげる。

僕は最後に彼女と手ぐらい繋ぎたかったな　と走馬灯みたいに思った。

「ヤメテェェッ！！」

耳をつんざく悲鳴。どこから？　彼女から、彼女はどこ？
なんだか無性に嬉しい。彼女が僕のために叫んでくれてることが。

ナイフマスク　（仮）　はハッとしたように一瞬立ち止まりよろめきながらなぜか駆け出した。そのまま逃げて行く。標的はラブだったんだろうか？　少なくとも僕だったら殺せていたはずだと思うけど……

なにがなんだかわからないまましばらく幸福に包まれていた僕は誰かが呼んだ救急車に担ぎ込まれた。肘からドバドバ血が噴き出していることにそのときようやく気づいた。

彼女が駆け寄ってきて付き添ってくれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5692i/

にんげんドラマ

2010年10月20日12時09分発行